

照明が付く。

そこは夜の鴨川。ベンチに男女が座っている。
どうやら、そういう雰囲気。

ばたー「あの」

こんじゅり「はい」

ばたー「きよ、今日は来てくれてありがとう」

こんじゅり「うん。暇だったし、」

ばたー「へへっ」

こんじゅり「、、」

・・・

ばたー「あつーいね？」

こんじゅり「うん。汗かいちゃった」

そういった服をパタパタするこんじゅり。

ばたー胸元が気になるが、我慢する。

・・・

ばたーあらためて。

ばたー「あの、さ」

こんじゅり「はい」

ばたー「今日は、アヤカちゃんに言いたいことがあるんだ」

こんじゅり「うん。なに？」

ばたー「あの！（以下ハモル）朝顔の花にも名残惜しさが感じられる頃となりました。お変わりなくお過ごしでしょうか。1回生の時から、世界地図見てたらベトナムの形がアヤカちゃんに見えて、それで、頭から離れなくなっちゃって、寝ても覚めてもベトナムの、いや、アヤカちゃんのこと頭がいっぱいで、だから、あのずっと好きです。僕と、付き合ってください。、、、え？ なんてはもって、、、」

こんじゅり「不思議？ あなたがこのことを不思議だと思ってるんだとしたらこっちが不思議。何回もやってんの、このくんだり。何回もやってるの。今月だけで8回目よ8回目！ 大富豪だったら八切で流れちゃってるわよ！」
ばたー「あ、じゃあ、もう一回僕の番だね」

こんじゅり「シャールアップ！ OK？ あと、なに？ 朝顔の花にも名残惜しさが感じられる頃となりました。お変わりなくお過ごしでしょうか？ なに？」

ばた「それは季節の挨拶だよ」

こんじゅり「いらぬ。告白の時って季節の挨拶いらぬ。これだけ毎回変わるから、グーグルで調べてきちゃった。私、グーグルで調べてきちゃった。そしたらあらま、ピツタリじゃない。あなたもグーグルで調べたんでしょ。アー便利ー。グーグル便利ー。あーあ。グーグルおじさん来ないかなー。かゆいところに手の届くグーグルおじさん来ないかなー」

グーグルおじさん来る。

川村「よんだ？」

・・・

川村「よんだ？」

こんじゅり「え、なに？」

川村「よばなかつた？」

こんじゅり「いいえ、え？ あ、あなたがグーグルおじさん？」

川村「よんだ？」

こんじゅり「はいはいはいはい」

ばた「ちよつと待ってくださいよ！ 何なんですかあなたは。急に現れて。俺、今日アヤカちゃんに告白する為に何度も何度も長瀬剛うたってきたんですよ！ それに俺、今日勝負下着なんですよ！ 俺！ 勝負下着なんですよ！」

川村「白ブリーフ。1080円」

ばた「え？ え、なんでそれを」

川村「何を言ってるんだよ少年。私はグーグルおじさんだよ。何でも知ってるさ」

ばた「本物」

こんじゅり「すごいわ！ 素敵！」

川村「君の検索履歴からおすすすめを紹介することだってできるんだ」

ばた「ちよつと待って。ちよつと待って」

川村「昨日の履歴、消したから大丈夫だと思ってるんだらう？」

ばた「え？」

川村「おじさん側からは丸見えさ！」

ばた「なんだって！？ じゃあ、今日うまくいったら行こうと思ってたイタリアンを調べていたことも」

川村「もちろん」

ばたー「もし、アヤカちゃんの名が僕の名になったときに、運勢がいいかどうかを調べていたことも」

川村「もちろん」

ばたー「そんなことを想像していたら、興奮して京都の風俗を調べまくったことも！」

川村「もちろんだ！」

ばたー「やめろー！」

こんじゅり「すごいわ、グーグルおじさん！ カルパッチョにカレーをかけて食べてるみたい！」

川村「気に入ってくれたかな」

こんじゅり「ええ。最高よ。私が求めていた、まさにその人よ。キミヲ君。悪いけど私、グーグルおじさんについていくことにしたわ」

ばたー「なんでだよ、アヤカちゃん」

こんじゅり「将来性。かな」

ばたー「将来性、、、」

こんじゅり「うん。なんか、キミヲ君と一緒にいる将来、想像できないし。じゃ」

ばたー「ちょっと待ってよ、アヤカちゃん」

こんじゅり「なによ。顔もよくないし、臭いし、成績もよくないし、臭いし、お金をいっぱい持つてるわけでもないし、臭いあなたがなんで私を引き留めるの？」

ばたー「レモン食べるから」

こんじゅり「なに？」

ばたー「レモン早食いして、臭いのなおすから！」

こんじゅり「なにそれ。どうせ、Youtube見て、自分も早食いできるようになったつもりでいるんでしょ」

川村「23時34分「Youtube レモン早食い選手権」」

こんじゅり「ほら、やっぱりそうじゃない」

ばたー「違うんだアヤカちゃん。ホントにできるんだ」

こんじゅり「じゃあ、やってみてよ」

ばたー「でも、相手がいないと早いかわかんないだろ！ 物事は相対的なんだ。オリンピックの陸上だって、みんな速いからボルトの速さが伝わってこないだろ！」

こんじゅり「わかったわよ。グーグルおじさんがやるわ」

川村「ん？」

こんじゅり「ほら、はやく」

川村「おじさん？」

こんじゅり「はやく」

川村「おじさん、ちょっとやだなあ」

ばたー「なんだよ逃げんのかよグーグルおじさん。俺からこの世界の全てを奪っていくくせ

に、いざ俺が漆黒の牙を剥いたら混沌の闇の中に逃げんのかよ」

川村「なんだよこいつ」

こんじゅり「さあ、行くわよ。位置について」

川村「やだなあ」

こんじゅり「用意、、ドン」

レモン食べる。グーグルおじさんが勝つ。

川村「なんか、得意だったみたいです」

ばたー「違うんだ！ この人が強すぎるだけで」

こんじゅり「近寄らないでもらえる？ レモン臭いし」

ばたー「くそ。くそ」

こんじゅり「じゃ。いいお天気で」

こんじゅり、上手にはける。

ばたー「ん？」

川村「新しい特技に気が付かせてくれてありがとう」

ばたー「もう行けよ」

川村「じゃ、いいお天気で」

グーグルおじさん変な方向に行く。

ばたー「ど、どこに行くんだよ！ アヤカちゃんがあっち」

川村「何言ってるんだ青年。私はグーグルおじさん。誰かだけのグーグルなんて、グーグルじゃないだろう？」

ばたー「ハードボイルドだな。負けたよ」

ふたり、握手。

川村「最後に彼女の今日のパンティの色を教えてあげよう」

ばたー「え」

川村「いいかい、一度しか言わないからよく聞くんのだ」

ばたー「何を？」

川村「彼女のパンティの色」

ばたー「え？」

川村「いくぞ。彼女のパンティの色は、、、」「白」

ばたー「あああああああ（耳を抑えて必死に聞こえないようにする）」

川村「じゃ。いいお天気で」

川村、下手にはける。

ばたー「あ、あ、あ、あ。くそ。く、くそおお！ 聞いとけばよかった。変なプライド働かせて耳をふさぐんじゃないかった。何色ですか！ パンティの色、何色ですか！ 神様教えてください！ パンティの色は何色ですかあ！（返事はない）は、はは、なんだよ。やっぱり神なんていないんじゃないか。はは。なんだよ。いいお天気です。そんな挨拶日本にねえよ。カンボジア人かよ」

しんぺー「カンボジア人はそんなこと言わないよ」

ばたー「え。誰？」

そこにはダンディ先生。

しんぺー「人は私をダンディ先生と呼ぶ。だが、私が誰かというのはある種、哲学的な問いだ。例えば君がドン小西だとする。でもドン小西っていうのは君の名前に過ぎない。いわばドン小西は君に充てられた記号だ。君はドン小西だからドン小西なのか、それとも君のどこかにドン小西をドン小西たらしめている何かがあるのか。いや、そもそもドン小西なんて存在するのだろうか。ドン小西はただの記号なんじゃないか？ ドン小西が記号に過ぎないのなら、ドン小西という皮を剥がれた後の、残ったドン小西はいったい何者なんだ？ ドン小西という記号を剥がれたら君はドン小西ではなくなくなってしまおうのか？ どうだ？ そんなことはないんじゃないか？ 君はドン小西という記号をはがれてもおドン小西なんじゃないのか。そうだろうか？ 君はドン小西だろうか？」

ばたー「違います」

しんぺー「ううん。違う。君はドン小西なんだ。縛られなくなっただけいい。自分を解き放つんだ。さあ、自信をもって」

ばたー「ドン小西じゃ、ありません」

しんぺー「逃げるな。君は今逃げてる。自分がドン小西である現実から逃げてるんだ」

ばたー「いや、僕は、、、」

しんぺー「ドン小西、だろうか？」

ばたー「、、、」

しんぺー「ドン小西、だね？」

ばたー「、、、はい」

しんぺー「うんうんうんうん。そうだね。そうだよ。君はドン小西だね」

ばたー「はい」

しんぺー「よし。それじゃあドン小西って10回言って」

ばたー「え、なんで？」

しんぺー「いいから」

ばたー「ドン小西ドン小西ドン小西ドン小西ドン小西ドン小西ドン小西ドン小西ドン小西
ドン小西」

しんぺー「いい響きだ」

ばたー「え？」

しんぺー「さあ、もっと」

ばたー「ドン小西ドン小西ドン小西ドン小西ドン小西ドン小西ドン小西ドン小西ドン小西
ドン小西」

しんぺー「まるでビル・エヴァンスの奏でるピアノのように豊かだ。さあ、もっと激しく」

ばたー「ドン小西ドン小西ドン小西ドン小西ドン小西ドン小西ドン小西ドン小西ドン小西
ドン小西」

しんぺー「ああ、ボブ・ディランを彷彿とさせるドン小西だ」

ばたー「ドン小西ドン小西ドン小西ドン小西（泣き声になっていく）」

しんぺー「どうした？ 布袋寅泰のギターのように、ドン小西が鳴いてるぜ？」

ばたー「好きだった女の子に振られたんです」

しんぺー「よく初対面に言えたな」

ばたー「、、、」

しんぺー「あと、君。なんかレモン臭いよ」

ばたー「、、、たべます？（レモンを出す）」

しんぺー「お言葉に甘えていただいておりますか（レモンを受け取る）」

沈黙の中、レモンをダンディに食べる。

ばたー「あの」

しんぺー「まあ、まで。食事中だ」

酸っぱいけど食べる。

しんぺー「なんだい？」

ばたー「あの、どうやったら、モテる男になりますか？」

しんぺー「その質問がナンセンスだな。モテるってことはダンディってことさ。ダンディの
意味は分かるかい？」

ばたー「えっと、元宝塚歌劇団のトップで、今は女優の」

しんぺー「それは檀れいだね。檀れいとダンディは口触りは似ているが、似ても似つかぬ生物なのさ。娘役だしね、檀れい」

ばたー「じゃあなんだっていうんだよ！（ぶちぎれる）」

しんぺー「どうした急に」

ばたー「たまに出ちゃうんですよね」

しんぺー「うん。できればやめてね」

ばたー「それで、ダンディの意味は？」

しんぺー「そうだな。ダンディってのは、人に流されないってことなんだ。自分でいつづける。それがダンディがダンディである秘訣なんだ」

ばたー「自分でいつづける」

しんぺー「そうだ。それは決してたやすい事じゃない。例えば君は、どうしたらモテるようになるかと聞いたね」

ばたー「はい」

しんぺー「その時点で君は自分でいるづけることに失敗している。それはもうダンディじゃない」

ばたー「僕はダンディにはなれないんですか？」

しんぺー「君は、どう思う？」

ばたー「、、、なれます。いや、なりません」

しんぺー「そうだ、その調子だ。君は今ダンディの入り口に立った。そして本当のダンディになるには試練を乗り越えなければならぬ」

ばたー「試練」

しんぺー「好きな女を守るのさ」

上手から「キャー」という叫び声。

上手から、川村とこんジュリ出てくる。

こんじゅり「ちょっと離して、グーグルおじさん。何するの」

ばたー「アヤカちゃん!？」

川村「リアス式海岸リアス式海岸!」

ばたー「何やってんだよグーグルおじさん!」

川村「うるせえ! こんなデバイス化された世の中にはもううんざりだ!」

ばたー「この短時間に何があっちゃったんだよ!」

川村「プールの中にコーヒーを一杯入れます。それを回収するためにはどうしたらいいでしょう」

ばたー「グーグルの入社試験だ」

川村「何がグーグルの入社試験だ! 見たんか! グーグルが出してんの見たんか! お

前が勝手に言ってるだけだろ！」

こんじゆり「助けてキミヲ君！」

川村「うるせえ！ レモンでも食っとけ」

こんじゆり「いやー」

ばたー「アヤカちゃんを離せ！」

川村「近寄るんじゃねえ！ フォツカチオにされてえか！」

ばたー「それを言われたら近づけねえ」

川村「この世界が悪いんだ。全部IT、IT、IT。剛力彩芽と付き合うのもIT、石原さとみと付き合うのもIT！ もううんざりなんだよ！」

ばたー「お前には関係ないだろ！」

川村「うるせえ！ そういうことを言ってんじゃねえんだよ！ オシヤレにオリーブオイルかけてやろうか！ あ、ご結婚おめでとうございます」

しんぺー「まあ、そう熱くならず」

川村「誰だてめえ」

しんぺー「あ、わたくし、こういうものです（名刺を渡す）」

川村「あ、ご丁寧にどうも。あ、ダンディさん。あ、すみません私あの、今名刺きらしてまして、代わりと言っちゃなんなんですが、これで（拳銃を渡す）」

しんぺー「あ、いいんですか。すいませんなんか（発砲）」

川村「うわあ！ あひいあひい」

ばたー「何やってるんすか」

しんぺー「何をやっているかと聞かれたら、私はただ引き金を引いてみただけだ。ボタンと同じさ。ボタンって、押しちゃいけないって言われても押ししたくなるだろう。それと同じように引き金も弾きたくなってしまふものなのさ」

ばたー「そんな」

川村「あひい。あひい。俺だって、ガツキーと付き合いたかった！ ガツキー俺もITだよお！」

しんぺー「（発砲）」

川村「あひい！ ガツキー！ 俺も、ITだよお！」

しんぺー「（発砲）」

川村「ガツキー！ 行け！ 二人とも、ここは俺が食い止める（発砲）あひい！」

ばたー「どういうことだよ」

川村「勝負下着、なんだろ？ （発砲）あひい」

ばたー「グーグルおじさん」

しんぺー「かーらーすー。なぜなくのー。からすのかってでしょー」

川村「いけえ！」

ばたー「何かよくわかんないけど、行くね」

川村「ガッキー！（発砲）あひい！」

二人、ハケル。

取り残されるおじさん二人。

川村「あひい！ あひい！」

しんぺー「いつまで、あひいあひい言ってんだグーグル」

川村「久しぶりだな。ダンディ」

しんぺー「思い焦がれる気持ち、その出会いを久しぶりにするのさ」

川村「相変わらずシケてやがる」

しんぺー「チュッパチャップスいるか？」

川村「丁度その気分だ」

ダンディ先生、チュッパチャップスを渡す。

川村「お前のは何味だ」

しんぺー「何味だろうがこの再会の時が豊かになる事に変わりはないさ」

川村「あ、お前コーラ味だろ！」

しんぺー「さあな」

川村「おまえ、コーラ味よこせ！」

しんぺー「あげないよ」

川村「こいつう（くすぐる）」

しんぺー「あ、やったな（やりかえす）」

おじさんふたりじゃれあう。笑う。

幕裏から、ばたーとこんじゅりの会話が聞こえる（最初と同じ）。

しんぺー「なんだか、歌いたくなってきたな」

川村「奇遇だな。俺もだ」

そういつて二人は、ビートルズのオール・ユー・ニード・イズ・ラブを歌う。裏では若い二人の甘酸っぱい青春が行われている。